

兵庫県医師会医療支援チーム（第10陣）「宮城県災害支援現地報告」

常任理事 足立 光平

ちょうど一ヶ月目の現地。多数のボランティアが駅周辺を中心街の瓦礫と泥を清掃して、見違える様になってきたところと手つかずのところの落差が大きくなり、それだけ、家も何も失った避難者とそうでない者との落差も大きくなっていく時期。言われてきたように、東北人の静かに耐え抜く姿に感じ入ったが、しかし、一様にその表情には疲労・心労が刻まれており、あのような環境では当然とも思われる呼吸器・消化器等を中心とした症状と、その背後にあるものの重さを感じながらの診療となった。

限られた日程と時間では、応急的薬剤等の対応しか出来ない中、一日も早く「避難所」を脱し「仮設」等の「住」環境を提供・保障することが原則。そして、「かかりつけ医」はじめ、しっかりした「医」を立て直すことが急務。ただし、元の位置へとはいかない・・・

幸いにも無傷で残った石巻日赤が医療の核となって、全国からの支援部隊を統括し、バックベッドを保障し、また薬剤・医療資材のバックヤードともなって機能していることが極めて大きな意義を持っていた。これ抜きでの個別の派遣隊の困難は計り知れない位だ。

第10陣は、内科・外科・小児科というベーシックなメンバーでの対応となり、担当分担・引き継ぎもスムーズであったが、やはり、医師だけでは無く、看護師・薬剤師、それらを支える事務局という構造、本当の意味での「チーム医療」がこのような現場でこそ生きるものと強く感じられた。「お金持ち外国人」を呼び込んで濃厚医療で一儲けしようという「医療ツーリズム」とは正反対の世界がそこにはあった。現地、同行の各位に感謝を！

